【317】

氏　名（本籍）	矢橋　透（やばせ　とおる）（神奈川県）
学位の種類	博　士（文　学）
学位記番号	博　乙　第　2063　号
学位授与年月日	平成16年10月31日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	**仮想現実メディアとしての演劇** －フランス古典主義芸術における演技と視覚－

主　査	筑波大学教授		有　吉　豊太郎
副　査	筑波大学教授	博士（文学）	荒　木　正　純
副　査	筑波大学助教授	D. L.	増　尾　弘　美
副　査	筑波大学助教授		青　柳　悦　子
副　査	筑波大学教授	D. L.	川那部　保　明

論文の内容の要旨

本論文は，フランス古典主義演劇のテクストにおける，「演劇的策略」および「演劇的イメージ」，それに相関する「視覚の不確実さ」のテーマが頻出する現象とこの時代の「懐疑主義的危機」とを関連させることで，古典主義演劇の読み直しを試みたものである。

論文の構成は，以下のとおりである。

第一章　転換期の鏡――モリエール『プルソーニャック氏』について
第二章　王は踊る／王は見る――モリエール『豪勢な恋人たち』について
第三章　演技と排除――モリエール『町人貴族』に関する文化の詩学
第四章　演技の光と影――ラシーヌ『バジャゼ』について
第五章　仮想現実（ヴァーチャル・リアリティ）メディアとしての演劇
　　――コルネイユ『イリュージョン・コミック』について
終　章　「フランス古典主義演劇再考」の研究史的批評史的意義
付　章　近代形成装置としての絵画
　　――プッサン『ピュラモスとティスベのいる嵐の風景』を巡って
参考文献一覧／あとがき

第一章では，これまで本格的に論じられることがなかった『プルソーニャック氏』には，一方で，シャリヴァリやカーニヴァルなど民衆習俗などの中世的側面，他方では，資本主義的貨幣交換といった近代的側面など，大きく旋回する時代相の反映が見出されることが指摘される。そしてこの大転換期の懐疑主義的危機がもたらす世界の仮象化＝劇場化と，本作品における「演劇的なもの」の漸増とが並行的に観察され，関連づけられてゆく。

第二章では，ルイ14世自らの示す意趣を体して構成された『豪勢な恋人たち』に，「宮廷祝祭」対「演劇ジャンル」という二元構造をもつ作者の演劇論をあぶり出す。この作品には，国王が構想していた宮廷スペクタクルに対する批判的な眼差が認められることを指摘し，その一方で世界の劇場化と対決する演劇的策略，つまり「演劇性のテーマ」が積極的に主張されている，とする。さらに，国王の象徴体系も従来の「神話的な」ものからその具体的な功績を評価する「歴史的」なものに転換しているという点も明らかにされる。

第三章では，モリエール『町人貴族』を分析して，曖昧な階層に属する突然変異体である“町人貴族”を演劇的策略によって排除・抑圧することと，オリエンタリズムという東洋を排除しようとするひとつの文化現象とがともに舞台に上げられていることを指摘する。西洋の知が近代的世界観を形成するにあたって採られた表現的身振りは「演技」と「排除」であり，演技と歴史的現象との絡み合いを介して，演劇が明らかに知を先導するメディアとして機能している事実を主張する。

第四章では，著者の論拠に対しては反証になりかねない，情念を前にした「演技」の無力を描くラシーヌ悲劇『バジャゼ』の読解を通して，世界の仮象化に直面するとき「演技」へ向わざるを得ない人間の正体をつきとめる。モリエールやコルネイユのように直截的ではないが，伏在している演劇的イメージや語彙，「演技」や「視覚」のテーマがひとつひとつ掬い上げられる。また，演劇的小道具である「手紙」について，時代の転換期における「視覚」と関連づけて，新たな発見と重要な位置付けを行っている。

第五章では，劇中劇形式を本格的に採用している唯一の例である，コルネイユの『イリュージョン・コミック』の，文字通りのメタ演劇的傾向に注目する。既存の世界観・価値観の崩壊と「仮想現実メディアとしての演劇」の展開の相乗作用について検討し，演劇が新たな価値観や社会モデルの創出を担っていたことを指摘する。神が支配する世界に包摂される中世的主体から，仮象世界を逆手にとって「演技」することで世界を客体化せんとする近代的主体へと脱皮してゆく過程と，他方，社会的地位を確立してゆく職業としての役者の登場とが軌を一にしていると結論する。

終章では，演劇的テーマや懐疑主義的テーマについての研究史を概観する。本論文が採用した立場についての総括となっている。論文全体を通しての鍵概念ともいうべき「懐疑主義的テーマ」「演劇的テーマ」「視覚的プロブレマティック」という三本柱を立て，それぞれにおける研究史を具体的に洗い出している。当研究の射程には，広範な文化現象も入れられ，いわば脱領域的視点も大いに採用されていることがあらためて指摘される。

付章では，近代形成の時代の懐疑主義的意識は，演劇のみならず美術においても全く共通する視覚的プロブレマティックを抱えていることを指摘する。著者は，同時代の科学や演劇の視覚に関する問題意識をプッサンの絵画に照射し，この絵画の独自の解釈を導きだしながら，17世紀という時代は，科学と演劇と美術とが同一方向の視覚的問題意識に動かされていたことを論証する。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は，フランス古典主義演劇のテクストにおける，登場人物の「演劇的策略」や「演劇的イメージ」の頻出と，それが「視覚の不確かさ」のテーマと結びついている点に着眼し，これらの現象が時代の「懐疑主義的危機」と密接に関連することを独自の論拠として，隣接するさまざまな脱領域的立場から視野を広くとることによって，古典主義演劇の読み直しを行ったものである。

著者は，参考論文『劇場としての世界，フランス古典主義演劇再考』において，本論文の基底をなしている独自の視点を模索し，ついに確信するに至っている。それは，懐疑主義的危機による世界の仮象化が世界の劇場化（劇場としての世界）を結果したこと，そのことと演劇の舞台上における演劇的策略（あるいはイメージ）の頻出とが無縁でないことを指摘している。本論文に至って，こうした社会と舞台上の二つの現象が双

方向的に作用をしていること，さらには，演劇が近代的世界の形成装置すなわち「仮想現実メディア」としての積極的な役割を担う方向性をうちだすようになってきたことを，結論するのである。旧世界の解体，演技による人間主体の形成，近代世界の再構築，という理路は明解であり，説得力のあるものである。

本論文は，フランス古典主義文学の研究において，とりわけ二つの点で独創的である。ひとつは，脱領域的視点を採用したこと，もうひとつは，演劇におけるメタ演劇性に注目したことである。科学史，思想史，文化史，社会史，美術史，経済史等にわたる広い視野をもち，アナール派歴史学，英米文学批評の新歴史主義，ニューアート・ヒストリー，演劇社会学等の成果を積極的にとりいれることによって，作品中に見られる広範な文化現象：宮廷祝祭，修辞学，バロック都市，オリエンタリズム，料理革命等の具体的な検討と演劇性との相関関係を巧みに浮上させることに成功している。従来，フランス文学研究が一般的に，現代との根本的な思想的落差を無化するような形で理解してきたこと，テクストをせいぜい「風俗劇」「性格劇」の枠内に限定し，当時の社会風俗や人物モデルとの照合，先行テクストとの関連，粉本の影響関係，作家の執筆状況，上演時の諸状況などの周辺を往来してきた現状と比して，この研究領域に本論文は新たな展望を開いたと評価することができる。

しかしながら，時代を「懐疑主義的危機の時代」であるとして一括りに規定し，それによって論証は直線的で簡明でありながら，逆に，他の演劇現象の検討へ複線的に広がってゆく可能性を阻害しているきらいがある。そもそも，「演劇性」が問われるならば，時代思潮を超えた「懐疑」そのものも問われなければなるまい，という疑問がのこるのである。著者の主張どおりにこの両鍵概念が相互に照射しあっているならば，懐疑主義についての新たな発見も，今後，期待されるところである。また，フランス古典主義演劇についての伝統的な先行研究全般の概略についての批判的検討がなされていれば，本論文のオリジナリティは更に鮮明になったであろう。

ただし，本論の主眼とも云うべき近代的価値創造における演劇の重要な役割を説得力のある形で記述することに成功していることは確かである。視野を広くとり，新しい理論を積極的に取り入れ，広範にわたる隣接領域の成果を踏まえることで，伝統的な文学史の時代区分やジャンルの仕切をも超えた地点に立ち得て，作家研究のみならずフランス古典主義文学研究にとっても大いに寄与することは確かであると判定することができる。

よって，著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。